パチンコ依存 第2回

――相談現場からの報告

柏木勇一
産業カウンセラー・家族相談士

サラ金のはしごに陥る両親の「甘さ」も下地に

都内から隣県に入るある私鉄駅の改札口で待ち合わせた。失業中の20代後半Bさん。電話で1回だけ話していた。当初、会うことには抵抗していたが、親の仲介ということもあったのだろう。「終わってしまったことはもうどうしようもない。これからのことについてちょっと話し合ってみようか」という提案を受け入れてくれた。話し合って何かがすぐ変わるという期待はなかったが、家族以外とのコミュニケーションがないBさんには他人と会うことだけでも効果はある、という思いはあった。

ほっそりとした体型。はにかむような笑い。しかしあまり視線を合わせようとはしなかった。喫茶店でも、と事前に伝えていたが、Bさんが案内したのはファミリーレストラン。幸い、昼時を離れていたので隅のテーブルを選ぶことができた。

仕事についていけない。その憂さ晴らしにパチンコへ。瞬間的な儲け。自制心の欠落。そして借金――というパチンコ依存の典型的な流れをBさんは歩んだ。その期間はざっと5年。もちろん、Bさんの心の弱さに原因はあったが、両親の甘い態度も底流にあった。そんな見立てをしつつ、待ち合わせ場所に向かった。債務整理のための弁護士相談だけなら電話でも済む。電話でいくら「分かりました。大丈夫です」という返事をもらっても、その時の表情で確認しなければ本物かどうか分からない。カウンセラーが心がけなければいけないことでもある。

部品製造の孫請け 両親はかかり切り

「息子がパチンコ依存症になってサラ金から借金もしてしまった。どうすれば自立してくれるだろうか。できれば息子にアドバイスして欲しい」というBさんについての相談は、まず母親からの電話で始まった。父親は、Bさんと面談した私鉄駅の近くで、工作機械の部品製造業を経営。中堅企業の孫請けという位置づけ。従業員5～10人の規模と言っていたが、景気の波で受注量が定まらず、一定はしていなかったという。母親も従業員の食事の世話や、帳簿類の整理に追われていた。母親からの電話を受けた数日後、こちらからお願いして夫婦一緒の面談につなげた。

一方の話だけでは間違った理解になりかねない、という理由のほかに、息子ひとりのことだけではなく、家族の問題として取り組む必要を感じたからだった。

Bさんは専門学校を経て都内のIT系企業に就職。母親の話ではプログラマーとして勤めていた。深夜勤務が多いということもあり、自宅を離れアパート暮らし。いきなりの一人暮らしでは生活も困るだろうと、アパート代は親が負担した。両親は家業を継いでほしいという願いを持ちつつも、景気の波に左右されやすく、将来を考えれば、果たして生き残れる仕事かどうか分からない。朝から晩まで働く両親の姿を見ていたBさんも乗り気ではなかった。

採用された職種も事実と違うことを

Bさんが勤める会社自体も、IT関連とは言いつつも、企業のシステム保守・管理の請け負い業務が主体。競争の激しい業界の中で、経営も雇用も安定はしていなかった。電話口のBさんは「自分の就職はラッキーでした。ちょうどいろんな会社がIT化に取り組む時代で、会社もとにかく人手が欲しく、私のようなものでも採用されたのですから」と、言葉を選びながらも自虐的に語った。この自分を否定的にとらえてしまいがちな性格も、パチンコにのめりこんでいった背景のひとつではないかと判断ができた。

それを裏付ける発言や考え方は、この1回の面談の中でもいくつか出てきた。例えば、母親には「自分はプログラマーとして採用された」と伝えていたことが、事実ではなかったこと。「何となくかっこいい言葉を出しておけば両親は安心すると思って。本当はそんな能力はないのです。みんなについて行けなくて、惨めな思いをするくらいなら、と専門学校も欠席が多くなりました。家はちゃんと出たのですが、行く当てもなく、そんな時です、パチンコに行くようになったのは。もっともその頃は、時間つぶしが目的だったので、黙って座っている時間が多く、そんなにお金は使わなかったのですが」と語った。

このあたりの話は電話では話してくれなかった。直接向かい合うことで出てきたポツリポツリと語られた真実だった。

就職してたった1年パチンコが日常生活

Bさんがパチンコにのめりこんだのは、就職してわずか1年、仕事に行き詰まりを感じてからだった。先輩に教えられながら何となくこなしてきたが、肝心の基礎知識が伴わないので、独り立ちできる自信はなかった。職場が顧客先オフィスに変わってからは、頼りになる先輩はいない。しどろもどろの仕事ぶりに顧客先からも信用されなくなり、顧客先勤務はお役御免となった。会社内でスキルアップの特訓を受ける毎日になったが、すでに自分の能力の限界を感じていたBさんは、仕事への意欲も出なくなり、遅刻と欠勤を繰り返していた。こんなに窮屈な思いをして会社なんかにいたくない。クビになったっていい。といっても、給料をもらえる間は自分から退職は言い出したくない。いったい自分には何がふさわしいのか分からない。父親の仕事を受け継ぐにもいまさら修業なんかできない。従業員からバカにされるだけだろう。堂々巡りの果てに、ある時はすべてを忘れようと、足はパチンコ店に向かっていた。

運命のいたずらとでも言えるのだろうか。最初に3万円儲けた。これが、2回、3回と続いた。しかし、負けるのも早かった。1万、2万と呑まれていった。「これぐらい1回当たれば取り戻せる」――Bさんは射幸心のとりこになっていった。わずかな給料と親からの仕送りを家賃には回さないで、食事代も削り、パチンコにつぎこんだ。

職場には「体調がすぐれません」と偽って何度も休み、パチンコが日常生活に組み込まれ、少しの勝ちと負けの繰り返し、そして、手元の金はみるみる消えていった。パチンコ通いが病的になるステップをBさんは確実に歩んでいた。

もう一回大儲けそれでやめよう

「もうやめよう」「こんな生活が長続きするはずがない」「もともとパチンコは儲かるようにはできていない」「会社を辞めて実家に帰り、親に頭を下げよう」。Bさんは自分の至らなさを責めた。しかし、パチンコから抜け出さなけ

れば、と考えつつも、実際の行動につなげることはできなかった。「どうにでもなれ、という思いでした」とBさんは語ったが、「もう1回大もうけしたら、そこでやめよう」という、執念を断ち切ることがなかった。その結果が借金だった。

駅前から見える大きな看板に誘い込まれるように消費者金融のドアを開けた。愛想の良い受付係。借金をする後ろめたさも薄れて初回は5万円借りた。契約書を受け取り、返済計画や金利計算書にも目を通したが、さほど難しいとはその時は思わなかった。その足でパチンコへ。勝ちと負けの繰り返しが変わるわけではなかった。そして手元の金が減っていくことも。騒音と熱気の中だけがBさんが生きていることを実感できる空間になっていた。時々儲かった時は返済に回すことはあったが、やがて返済が滞りだし、消費者金融のはしごも始まった。

無表情、目もうつろ、体重の減少――休みがちで、たとえ出社しても仕事が満足にできる状態ではなかった。会社から解雇通告を受けても反発する気力もなく、黙って受け入れた。

ざっと2百万円超 責任のなすりあい

もう駄目か。今から自分に何ができる。悶々としてふとんにもぐりこんでいた。アパートのドアをたたく音で目を覚ました。そこにいたのは母親だった。返済催促の手紙が実家にも送られていたのだ。母親訪問のタイミングはBさんにとっては大きな救いだったと判断できるかもしれない。アパートを引き払って実家に帰る約束をした。

実家で待っていたのは当然のことながら両親、特に父親からの激しい叱責だった。母親は怒りを通り越してただ泣くばかり。Bさんは、父親の態度におののき、サラ金の証明書、領収書のレシートなど5社に及んでしまったすべての書類を畳の上に置いた。既にぼろぼろになっていたものもあったが、この保管されていた紙切れのような証明書類が、後日重要な役割を果すのだが、一家は何も知らず、ただあきれ、おろおろするばかりだった。金利も合わせて総額ざっと2百万円超。このままでは金利が金利を呼び、雪だるま式に増えていくだけだろう。金銭の話になると、母親の方に理解力があった。

「とにかく何とか返さなければ」

「息子に返させろよ」「できるわけないでしょう」「時間かけてでも息子の責任だ」「その時間がないの」…こんなやりとりが続いたという。夫婦一緒の面談ではこんな会話もあった。

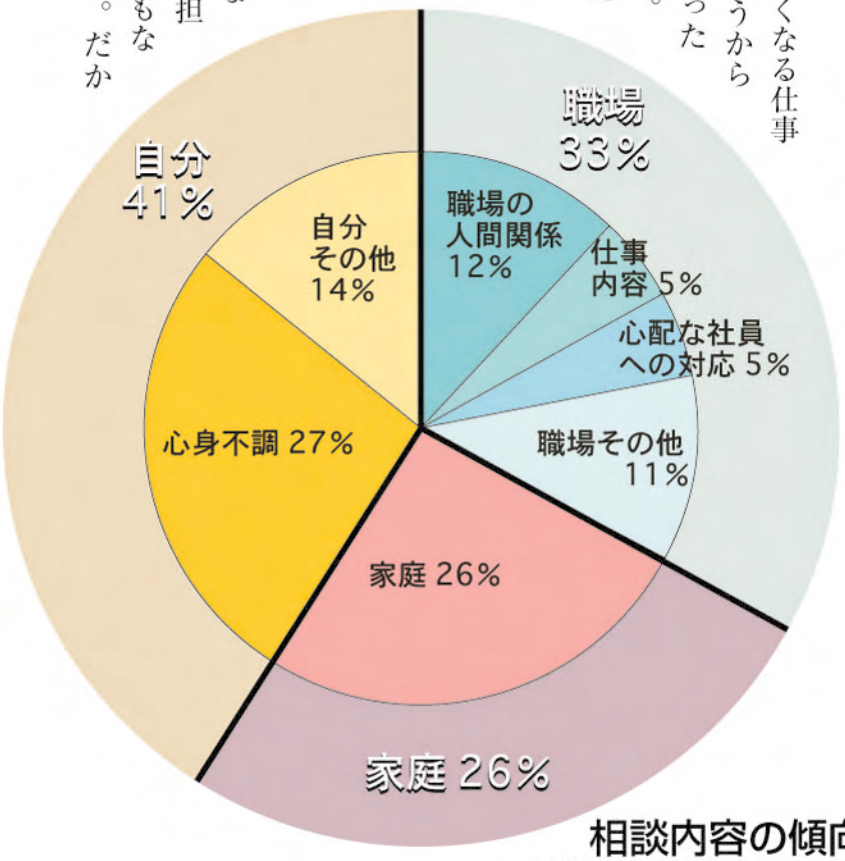
父「（妻に向かって）大体お前が甘やかしたからこんなになったんだ。ちょっと無理すれば家からだって通えるのにアパートなんかに住まわせて」

母「夜遅くなる仕事だっていうから仕方なかったじゃない。あんただってあの時黙っていたでしょ。何よ今さら…」

父「アパート代まで親が負担することもなかったな。だからパチンコにも行ったんじゃないか」

母「給料がいくらだか知ってたの？あの額じゃ無理よ」

子どもの問題を語り合う夫婦の場合は、おおむねこのような会話になる。カウンセラーという第三者の前でも、お互いが自己弁護に走る。Bさんの行為を批判することは簡単だが、子どもを心配するあまりに良かれと思った行動が、実は、子どもの甘い生活を生む土壌になっている、という図式が浮かんできた。



相談内容の傾向
東京都内の民間相談機関の2009年実績

取っておいた書類で返済が少し楽になる

サラ金への返済については母親が押し切った。とりあえず、ということで親が返済した。親に余裕があったわけではない。小さな工場をやりくりしている立場では痛い出費だった。放っていたら利息が増殖していく実態は父親も分かっていた。「息子の自己責任だ。親は関係ない」という主張を降ろさざるをえなかった。とりあえず、というのは息子が親に対して定期的に返済するという条件をつけたのだった。それがいつになるか、親にも見通しはなかった。何とか息子に立ち直ってもらいたいという親心の表れでもあった。

Bさんはうなだれながら両親の説教を聞いた。これからどうする？という問いかけには「仕事を探す」と答えるしかなかった。父親は、あきらめたとはいっても、家業を継いでもらいたいという思いから離れられなかったが、こんな息子では真面目にやっている従業員に言い訳ができないだろう、というのが結論だった。

両親と面談した際、アドバイスするという立場ではないことを分かってもらった上で、Bさんに会うことを了承した。

消費者金融の債務返済については、期間と金融会社の数、領収書類の有無を確認して、債務整理専門の弁護士への相談を提案した。一時、強引な返済要求が社会問題になって以降、利息の見直し、利息制限法適用などが進んでいた。Bさんのケースにも法律で救済される部分があるのではないか、と予測できたからだった。

両親の話では、Bさんはハローワークに通い、新聞の求人チラシ広告にも目を通し続けているという。IT系の仕事はさすがに敬遠していることも分かった。

簡単な挨拶を交わした後、Bさんは様々ないきさつを語る前に、いきなり「ありがとうございました」と頭を下げた。まだ何も話していないのにどうして？と思った。続けてBさんは「弁護士が間に入ってくれて、証明書が証拠になって、実は高い利息で返済していた分がありました。返すお金が思っていたよりも少なくて済みそうです」と語った。

「やめようよ」などの言葉はまず意味がない

想定していた展開だった。一緒に安堵しつつ、どん底まで落ち込んでからでないと本当の立ち上がりはできないと考えていただけに、Bさんにはここに至っても妙な幸運がついている感じもした。一人息子に対する親の甘さなども含め、今回はパチンコだったけれども、Bさんが依存に誘い込まれる環境もあったことは指摘できた。

「お父さんもお母さんも本当に働き者だと思うよ。喧嘩もしているようだけれど、助け合って頑張っているよね。いつか二人で温泉でも行ってほしい、なんて他人なのに感じてしまった」とさりげなく話しかけた。「もうパチンコは懲りたろう。やめようよ」などと当たり前のことを言っても始まらない。ちょっとフレームを変えた話しかけが、このような場合は効果がある。返事はなくてもいい。実際Bさんはうなずいただけで「派遣会社に登録したのですが、運送会社からいい返事がきそうだという連絡を受けました」と語ってくれた。

この後、Bさんがどんな人生を歩むかは分からない。またパチンコに行くかもしれない。一途に自制するのではなく、いつでも、どこでも、気軽に行ける〝遊び〟として自覚できれば、Bさんはやっと自立できると考えながら別れた。

働く人の相談を当人や家族からも受けているある民間相談機関の最近の相談内容を見ると、家庭の問題が26%占めている。ここには夫婦関係、子どもの不登校などのほか、ギャンブル依存、アルコール依存なども含まれている。依存症は、自分からは外部に助けを求めることは少ない。家族や周囲が気づいて初めてつながる。従って一人暮らしの場合は、相談や治療という表舞台にはなかなか出てこない。Bさん以上に深みに入っている依存者の実態はあまり把握されていない。

柏木勇一（かしわぎ ゆういち）

大学卒業後、会社勤務を経て、現在はEAP企業（Employee Assistance Program）でカウンセラー及び研修講師として活動。
厚労省認定産業カウンセラー、キャリア・コンサルタント、家族相談士、交流分析士